

禁野火薬庫略年表

年	社会のできごと	禁野火薬庫関係
明治 27	1894 日清戦争開始	陸軍、用地買収に着手
明治 28	1895 日清戦争終結	
明治 30	1897	「砲兵第二方面本署禁野出張所」として開設 「大阪陸軍兵器本廠禁野弾薬庫」と改称
明治 36	1903	「大阪陸軍兵器支廠禁野弾薬庫」と改称
明治 37	1904 日露戦争開始	
明治 38	1905 日露戦争終結	
明治 42	1909	8月20日、火薬庫が爆発し、施設の大半が倒壊
大正 3	1914 第一次世界大戦開始	
昭和 6	1931 満州事変	
昭和 8	1933	大規模な用地買収に伴い、新設工事多数開始
昭和 11	1936	片町線津田駅から禁野火薬庫への専用鉄道引込線を敷設 「大阪陸軍兵器支廠禁野倉庫」と改称
昭和 12	1937 盧溝橋事件 (日中戦争～1945)	
昭和 13	1938	東隣に「大阪陸軍造兵廠枚方製造所」開設
昭和 14	1939	一大軍需施設として、土地・建物とも拡充ピーク 3月1日午後2時45分爆発事故発生、午後7時までに29回もの爆発を記録 陸軍の報告書によると死者94人、負傷者602人におよぶ大事故となる 爆発終息・鎮火後の3月4日から、1941年にわたり復旧整備
昭和 16	1941 アジア太平洋戦争	
昭和 20	1945 終戦	稼動停止と戦後処理

関西外国語大学新キャンパス建設に係る埋蔵文化財発掘調査

禁野本町遺跡 - 近代禁野火薬庫 - の発掘調査

平成 27 年 7 月 18 日



公益財団法人 大阪府文化財センター



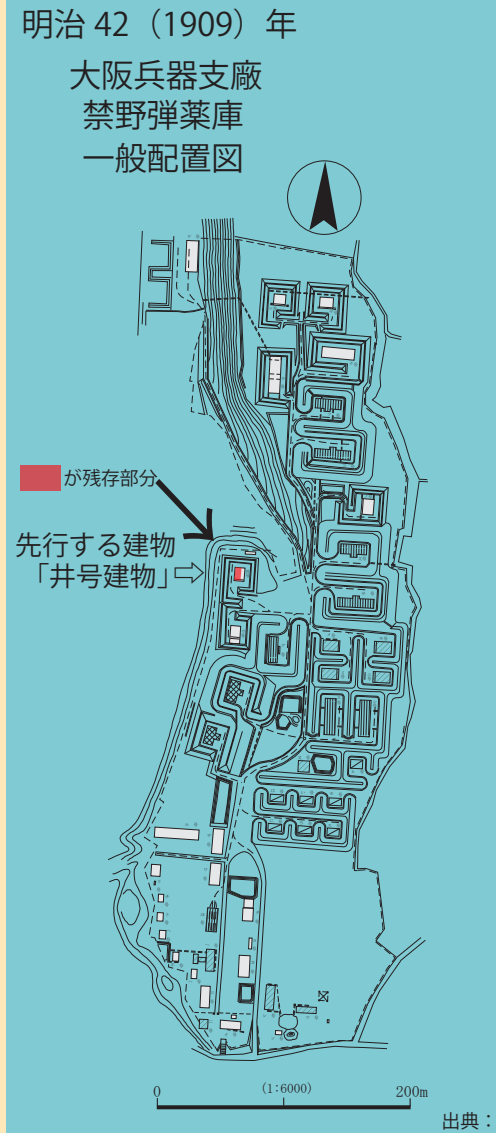
禁野本町遺跡は、枚方市禁野本町1丁目・2丁目、中宮北町・中宮本町に所在する奈良・平安時代から近代の遺跡です。

禁野火薬庫は、日清戦争が始まった明治27（1894）年、陸軍は用地買収に着手し、明治30（1897）年から火薬庫として機能しました。明治37（1904）年に始まった日露戦争の後、明治42（1909）年に火薬庫が爆発し、施設の大半が倒壊しました。しかし、火薬庫は復旧・拡張され、大正3（1914）年に始まった第一次世界大戦をへて、1930年代には大規模な増改築が進み、昭和11（1936）年には津田駅からの引込線も敷設されました。昭和12（1937）年には日中戦争がまり、戦争の拡大につれて禁野火薬庫は弾薬の供給におわれるようになります。

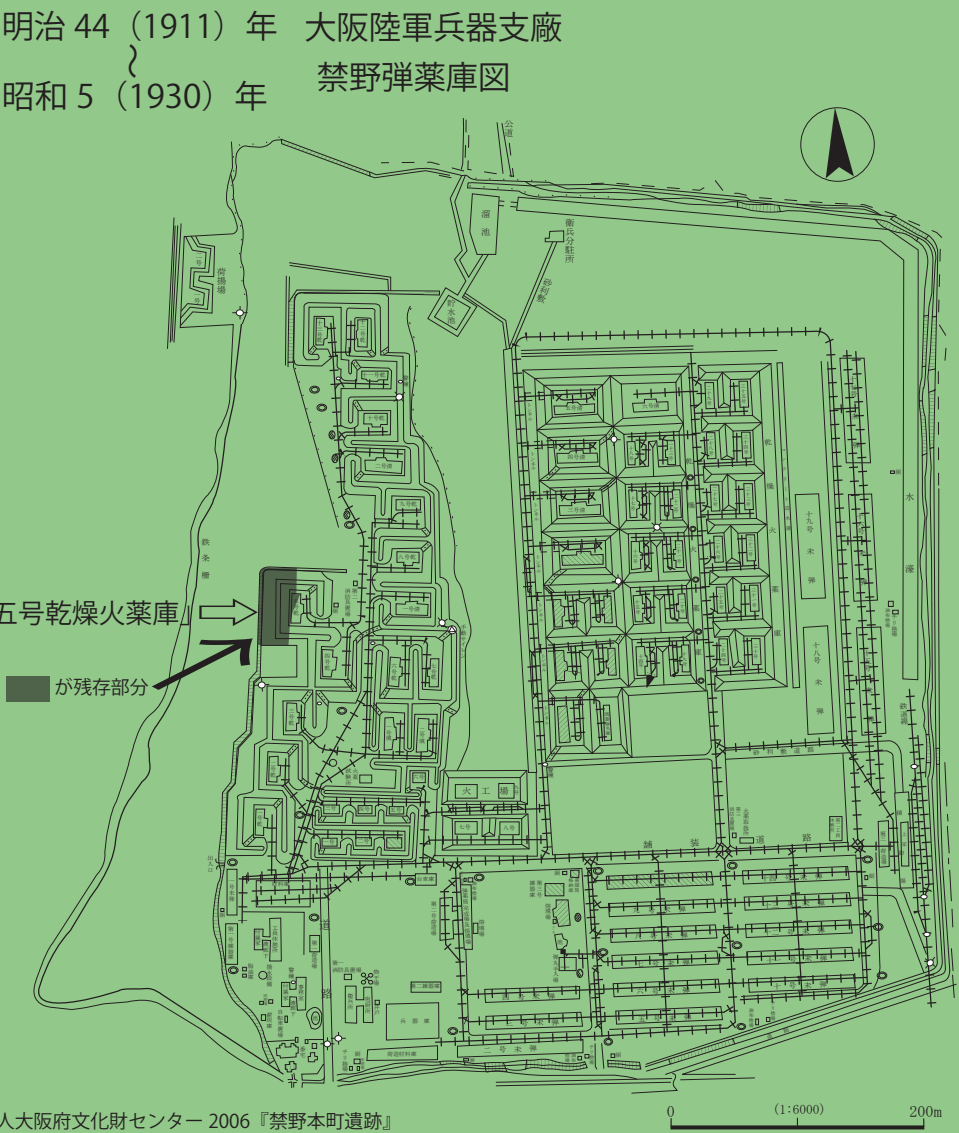
昭和14（1939）年3月1日、十五号倉庫において信管をはずす作業中に発生した事故のため発火し、他の倉庫の弾薬に飛火して次々と大爆発が起こり、周辺地域一体に大惨事をもたらしました。

今回の調査では、禁野火薬庫の土塁とともに、建物「五号乾燥火薬庫」の一部が明らかになりました。土塁は周囲に残る土塁の中でも最も状態の良いものです。土塁と建物を覆う炭化物層の状況からは、昭和14（1939）年の大爆発のすさまじさをうかがうことができます。

また、土塁北側の下から、五号乾燥火薬庫に先行する建物がみつかりました。建物は厚いモルタルの層の上になんが積みの壁がみられます。明治42（1909）年の禁野火薬庫の図面と対照すると、この建物は「井号建物」になる可能性があります。



今回の調査では、最盛期の禁野火薬庫における「五号乾燥火薬庫」の建物と土塁がみつかり、その具体的な構造を明らかにすることができました。また、これをおおう炭化物層の状況から、昭和14（1939）年の大爆発の様子をうかがうことができます。その他、北側の土塁の下からは、「五号乾燥火薬庫」に先行する建物がみつかり、禁野火薬庫の変遷を知る重要な資料を得ることができました。



禁野本町遺跡 - 近代火薬庫 - の発掘調査現地説明会資料

発行年月日：平成 27 年 7 月 18 日

発行：公益財団法人大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台 3－21－4



①建物の北西隅部では、一辺2mをこえるコンクリート床の破片が、裏返しになって折り重なる状況で出土しました。



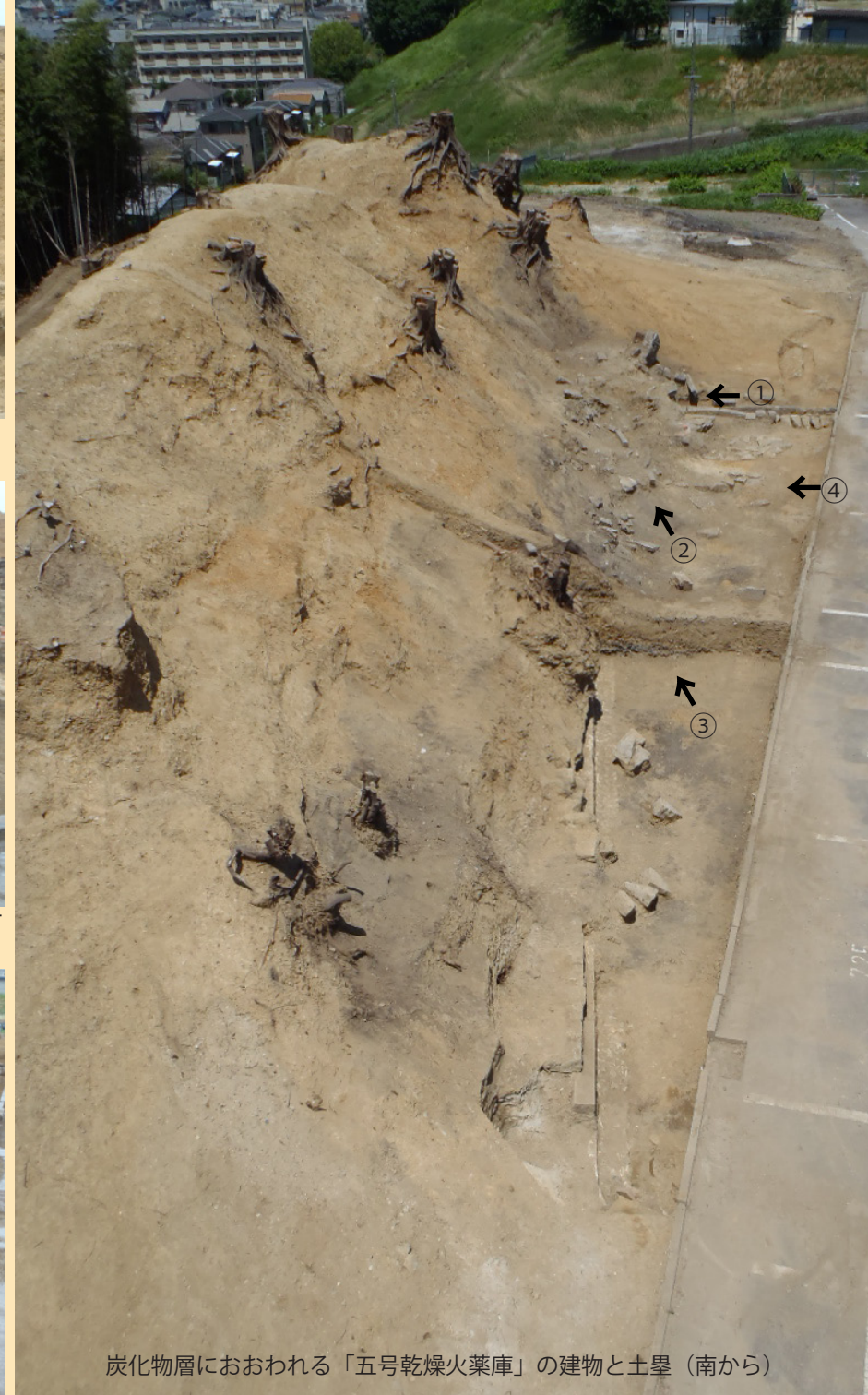
②炭化物は土塁の東側斜面下半部から建物の床にかけてひろがります。



③炭化物とともに、れんが・瓦・砲弾の破片が多量にみつかりました。



④建物の床は北西隅部にしか残っていません。他の部分の床は爆発で吹き飛んだ可能性が考えられます。



炭化物層におおわれる「五号乾燥火薬庫」の建物と土塁（南から）



炭化物層除去後の「五号乾燥火薬庫」の建物と土塁（南から）



⑤建物の周囲を巡る石組み溝。石の内面は熱を受けて赤くなっています。



⑥コンクリート床上にはれんがが積みによる壁がわずかに残ります。基礎には間知石を横に並べています。



⑦建物から溝への排水口。土管をモルタルで巻いています。

土塁は、五号乾燥火薬庫の周囲を巡っていた土塁のうち、西側の土塁とこれから屈曲する北側の土塁の一部にあたります。西側の土塁の東側斜面の調査を進めると、れんが・瓦・砲弾の破片等の遺物が多量に含まれる炭化物層がみつかりました。この層は、昭和14（1939）年の大爆発の際に堆積したものとみられます。とくに建物の北西隅部にあたる部分では、建物のコンクリート床の巨大な破片が、裏返しになって折り重なるように堆積していたことから、爆発に伴って、建物の床面が吹き飛んだ可能性が考えられます。

炭化物層を除去すると、五号乾燥火薬庫の建物の周囲を巡る石組み溝のほか、建物北西隅部の床面の一部がみつかりました。石組み溝は間知石を両側に積み、床面にモルタルを敷いたもので、モルタルには河原石が埋め込まれています。建物の床面はコンクリートで、その上にれんが積みによる壁がわずかに残り、また、コンクリート床の下は直径3cm前後の河原石の層があり、これを挟んで、基礎には間知石を横に並べたものを使っています。

なお、土塁は、石組み溝の上面（ほぼ現在の地表面に相当）より上の層は、すべて盛土で形成されていることがわかりました。



土塁（南から）。茶色の層は段丘の礫層。これより上の層はすべて盛土です。